離島の文化とその活用

森　雅人

要旨

本稿は，利尻島，礼文島，天売島，焼尻島の 4 島における文化資源を掘り起し，それらを観光振興(特に着地型観光)に活用するための課題を明らかにすることを目的としている。そのために，島民層の違いと人文資源に注目して，(1)ニシン漁の親方衆がもたらした文化，(2)小前の漁師(あるいは小前の漁師から親方になった漁師も含む，以下，小前の漁師)がもたらした文化に分けて記述する。4 島は文化的な類似性は強いが，観光振興上は大きく「宗谷定住自立圏」と「オロロンライン留萌中部エリア」の二つの経済圏に分かれている。また，松前を起点とする日本海文化圏における交流の可能性も残している。着地型観光を推進するには，住民主体のプラットフォームを構築することが不可欠であり，地域資源の掘り起しや住民活動の統合，異業種や外部機関との連携など，地域住民が事業主体となって実践的に活動することが重要となる。そうした活動の蓄積が地域のブランド力を醸成することにつながるのではないだろうか。

キーワード：離島，観光振興，着地型観光，プラットフォーム

はじめに

北海道の日本海側に浮かぶ利尻島，礼文島，天売島，焼尻島の 4 島は，「利尻礼文サロベツ国立公園」(1965 年指定)と「暑寒別天売焼尻国定公園」(1990 年指定)に位置しており，希少な動植物の保護地域になっている。しかし，厳しい自然環境ゆえに，市場との物理的・時間的距離が障壁になって，経済活性化を達成するには極めて不利な状況に置かれている。

1964(昭和 39)年 8 月 3 日から 5 日にかけて利尻島を訪れた民俗学者の宮本常一は，この島で住民自治が行われるようになったのは昭和 30 年頃から，という興味深い指摘をしている[1]。昭和 30 年代の日本といえば，復興期から大量生産・大量消費型経済へと移行した時期である。道内でも観光産業の形成は着実に進んでおり[2]，焼尻島ではニシン漁に替わる経済活性化の手立てとして，1962(昭和 37)年に「めん羊事業」を開始した。同年には「利尻空港」も開港している。

筆者は，4 島の自然資源に加えて，人文資源，特にニシン漁の痕跡やその後の漁業に生きる人びとの暮らしについても，その価値を掘り起こす必要があると考えている。以下においては，島民層の違いと 4 島の人文資源に注目して，その文化的特性を(1)ニシン漁の親方衆がもたらした文化，(2)小前の漁師(あるいは小前の漁師から親方になった漁師も含む，以下，小前の漁師)がもたらした文化に分けて記述したい。さらに，地域経済活性化のためには，これらの人文資源を単に保存するだけではなく，自然，食，教育など他の資源と有機的に結びつけることが求められることから，住民主体の着地型観光のあり方について提言したい。

1　宮本常一著・森本孝編『宮本常一離島論集第 3 巻　利尻島見聞／離島振興の諸問題』みずのわ出版，2013 年 10 月。

2　佐藤郁夫「北海道観光史」札幌大学『産経論集』22，1999 年。

1. 島民層の違い

宮本によれば，利尻島の親方衆は，はじめのうちは北海道西南部からニシンの漁期だけヤン衆を連れて渡ってきた[3]。彼らは漁場の近くに番屋をつくり，建網を張ってニシンをとったが越年はしなかった。越年したのはアイヌと交易をした運上屋やニシン等の産物を通して上方の商人と取引のあった問屋であり，問屋は泊・鬼脇・仙法志・沓形などに市街地らしきものを形成した。

やがて，とりきれないほどのニシンが利尻島に押し寄せていることを伝え聞いた東北・日本海沿岸の小前の漁師たちがこの島に渡り，磯舟を駆って刺網でニシンをとった。郷里に帰るには費用と日数を要することから，やむなく越年を決意した。

越年を決意した小前の漁師たちは，ヤン衆に比べれば恵まれていたという。なぜなら，彼らの暮らしは質素ではあったが，運が良ければ建網を買って番屋をつくり親方になることができたうえ，刺網にはニシンの時期が過ぎてもホッケがかかったからである。さらにイカ・タコ，タラ，昆布もとれ，漁具と漁法をかえれば一年間稼ぐ

3　ヤン衆の多くは，青森・秋田の海岸地方の農民であった。

ほどの仕事はあった。

ニシン漁の親方衆は莫大な富を背景に4島にも立派なニシン番屋を築いたが，島全体の幸福とは無縁の人々であった。したがって，ニシンがとれなくなると彼らは島を離れていったのである。

2. ニシン漁の親方衆がもたらした文化

2.1. 利尻島・礼文島

利尻島は，島の東半が利尻富士町，西半が利尻町という二つの自治体に分かれている。1956(昭和31)年に鬼脇村と鴛泊村が合併して東利尻村(1959年に東利尻町，1990年に利尻富士町)，沓形町と仙法志村が合併して利尻町となった。利尻島が観光地として注目されるようになったのは，1965(昭和40)年に「利尻礼文国定公園」に指定されてからであり，それ以降，名勝・名所としての資源開発が試みられた[4]。もちろん島に生息する希少な動植物は地域固有の価値を有する資源であるが，観光を通して文化を再構築し，その情報を発信することも地域の活性化にとっては必要な行為である。「ニシン漁の親方衆がもたらした文化」として，利尻島には神社に奉納された「船絵馬」が残されている(写真1，参照)。利尻富士町の8カ所の神社には，明治期から昭和初期にかけて航海安全を祈願して船頭らが奉納した50点弱の船絵馬があり[5]，礼文島内の厳島神社にも1892(明治25)年5月に讃岐国の船主であった岡松喜三郎が奉納した船絵馬がある[6]。利尻島・礼文島の神社には，船絵馬の他にもニシン漁との関連性を示す遺物が残っており，利尻富士町の厳島神社には場所請負人の藤野家のもとで本泊の運上屋で支配人をしていた阿部喜右衛門と住吉丸の船頭清六が，1830(文政13)年に寄進した石鳥居，常夜燈，手洗鉢がある[7]。この他にも，尺忍神社(礼文島)の「祈祷札」や厳島神社(礼文島)の「四ヶ散米舞」など，神社には地域固有の歴史・文化資源が集積している。

また，日本海沿岸地域では春先に南西からの強風が吹くことから，ニシン漁場ではニシンの一時保存のほか，船溜り，避難港として利用された「袋澗」が残っている。利尻富士町には泉の澗(鴛泊)，伊藤の澗(仙法志)，平田の澗(久連)が確認されている他に，ニシン漁の漁場を区切るために漁家ごとに設置された境界杭や魚粕用のニシンを茹でた釜場跡がある[8]。

こうした歴史・文化と生活産業を学ぶために，利尻富士観光協会では6月中旬から9月下旬にかけて「島まち歩き」(グループツアーの場合，最大10名まで)を行っている(図1，参照)。

写真1 明治15年　旭浜神社に奉納された船絵馬(弁財船)
(出所)「広報　りしり富士」No.222，平成23年5月。

図1 島まち歩き観光ガイド
(出所)利尻島観光案内，http://www.town.rishiri.hokkaido.jp/kankou-annai/1084.htm，2016年5月6日照会。

2.2. 天売島・焼尻島

天売島・焼尻島は羽幌町に属しており，同町のwebサ

4 利尻富士町のwebサイトには，「『観光』として注目したのは，ニシン漁が衰退した以後，名勝・名所を見直し資源開発を試みるようになった頃で，昭和40年には『利尻礼文国定公園』に指定されました。それ以前はというと，史跡・景観と言った程度でほんの一部の人が「遊覧地」として訪れていました。(中略)昭和49年には『利尻礼文サロベツ国立公園』に指定され，一躍『離島ブーム』がおとずれました」と記している。http://www.town.rishirifuji.hokkaido.jp/rishirifuji/1156.htm，2016年5月6日照会。

5 「わがまちタイムスリップ連載㉖航海安全を願う～船絵馬～」利尻富士町役場『広報りしり富士』No.222，平成23年5月。

6 「礼文島遺産」礼文町役場『広報れぶん』No.438，平成26年5月。

7 「わがまちタイムスリップ連載㉜利尻の弁天さま～厳島神社～」利尻富士町役場『広報りしり富士』No.228，平成25年5月。

8 「わがまちタイムスリップ連載㊲ニシン漁の記憶～今に残る袋澗と元標・釜場」利尻富士町役場『広報りしり富士』No.233，平成27年6月。

イトには「世界最大のウトウの繁殖地」(天売島),「密林と原生花　めん羊が育つ島」(焼尻島)と紹介されている[9]。両島はともに一村を形成していたが，天売村は1955(昭和30)年に，また焼尻村は1959(昭和34)年に羽幌町に編入合併された。

「ニシン漁の親方衆がもたらした文化」として，両島で注目されるのがニシン番屋である。2013年に両島を訪れた山之内は，天売島の旧池田家住宅(明治34〜35年築)，焼尻島の旧小納(こな)家住宅を調査している[10](写真2，参照)。池田家は山形県出身で，小樽市祝津の青山家とは親戚になるという。1961(昭和36)年〜1986(昭和61)年まで「天売ユースホステル」，その後「天売にしん番屋」として営業していたが，現在は廃業している。このニシン番屋は,夏季に行われている「地域おこし協力隊と行く　天売島『歩きテクチャー』」という観光ガイド・ツアーで開放されている(図2，参照)。

小納家は石川県出身で,焼尻島では漁業のほか,呉服・雑貨商を営んでいた。旧小納家住宅(明治33年築)は郵便局や電信局を併設した建物で，1978(昭和53)年からは羽幌町焼尻郷土館として活用されている。

また,焼尻島の神社の歴史も古く,厳島神社は1844(天保15)年に，松前藩の命によってニシン場を開設したとされる栖原家(小右ヱ門)の番人であった山田多三郎が現在の弁天先に神社を創建したと伝えられている。昭和10年頃に，水野長左衛門が秋田から持参したとされる七庚申の碑石もあることから，郷土史に詳しいガイドによる解説が行われれば，島歩きの魅力が一層高まるのではないだろうか。

写真2 旧小納家住宅(焼尻島/筆者撮影)

図2 天売島「歩きテクチャー」
(出所)るもい食楽歩webサイト，http://www.rumoiclub.net/shun/201507/20150706.html，2016年5月6日照会。

3. 小前の漁師がもたらした文化

3.1. 獅子舞の伝承

ニシン漁に従事していた漁民の中には，鳥取県から利尻島(利尻富士町)に渡って来た者もいた。彼らは「因幡衆」と呼ばれ,「麒麟獅子」という独自の文化を残した。利尻富士町のwebサイトによれば，1908(明治41)年頃に因幡から利尻島に渡ってきた人々が，異境の地でふるさとを偲び舞っていた[11]。その事情について鳥取市秋里の「荒木三嶋神社」には，1887(明治20)年代に利尻島に渡った伊佐田長蔵(鳥取市秋里出身)が長浜の子どもたちに麒麟獅子舞を指導したと伝えている[12]。この人物はニシン場の経営者として，多くのヤン衆を雇い「親方」と呼ばれていたという。宮本の言説に従えば，越年を決意した小前の漁師が「親方」として成功したということであり，ニシン漁場の社会的地位は，しばしば運や力量によって左右されたのである。

その後，麒麟獅子舞は大正期に途絶えたが，地元の若者たちが「麒麟獅子舞う会」を組織して2004(平成16)年に復活している。彼らは荒木三嶋神社の関係者との交流を重ねながら舞を習得し，2008(平成20)年には利尻ならではの麒麟獅子舞を創り上げた。毎年6月20日の仙法志神社祭典の宵宮祭には，長浜神社境内や特別養護老人ホー

9 羽幌町webサイト。http://www.town.haboro.lg.jp/sightseeing/index.html，2016年5月6日照会。

10 駒木定正(主査)・小林孝二(委員)・山之内裕一(委員)「北海道における漁家住宅の歴史・地域的特性を活かすための研究 ── 歴史的漁家住宅の遺構調査にもとづくまちづくりへの関与と発展 ──」『住総研研究論文集』No.41，2014年。

11 利尻町webサイト。http://town.rishiri.jp/modules/d3blog/details.php?bid=23，2016年5月6日照会。

12 加露神社webサイト。http://karojinjya.jp/index.php?id=98，2016年，2016年5月6日照会。

ムほのぼの荘で舞を披露している。

一方，利尻富士町では，「南浜獅子神楽」を伝承している。明治の中頃に，ニシン漁の栄華を夢見た「富山県」からの移住者が南浜に導入したといわれているもので，当初は南浜の「富士沼神社」に奉納していた。昭和43年には鬼脇の北見神社に移り，町の無形文化財に指定された。昭和56年には鬼脇青年団を中心とする「若獅子会」が活動を担っていたが，現在は公民館活動の一環として小学生によって継承されている。百足型の獅子舞で，富山県新湊市放生津を源流地としている。

小前の漁師たちが，共同祈願の対象として創建した神社とその祭礼において郷土芸能を奉納する行為は，定住の意思表示であり，コミュニティの結束を促す上で必要だったと思われる。

3.2. 松前神楽の伝承

利尻島と礼文島には，明治期に福島町の福島大神宮で始まったという「四ケ散米舞行列」が伝わっている。四ケ散米舞は松前神楽の演目の一つであり，代々神職によって受け継がれてきた武運長久を願い蝦夷鎮定を表す神楽舞曲である。これを神輿と一緒に練り歩くために，舞をイメージした行列として始めたのが「四ケ散米舞行列」である。利尻島では仙法志神社の祭礼で，礼文島では厳島神社の祭礼で，それぞれ行われている。礼文町の「四ケ散米舞行列」は，1922（大正11）年に厳島神社第三代宮司の常磐井武四郎が伝えている[13]。利尻島の北見冨士神社の祭礼には，「四ケ散米舞行列」と明治末期に松前から赴任した宮司によって伝えられたとする「利尻奴行列」が披露される。また，松前神楽は天売島にも伝わっており，1901（明治34）年頃には天売島厳島神社に奉納された。天売松前神楽保存会が継承していたが，現在は活動を休止している[14]。

このように，4島には，明治末期から大正期にかけて松前から赴任した宮司の影響によってもたらされた文化の痕跡が民俗芸能として根づいている。

13 「礼文島遺産」礼文町役場『広報れぶん』No.444，平成26年11月。

14 北海道の民俗芸能一覧（「北海道民俗芸能緊急調査」（H 7～9）のフォローアップ集計）。http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/270220minzokugeinou.pdf，2016年5月6日照会。

4. 離島の観光振興

離島の観光振興にとって大きな障壁となるのが，移動にかかるコストの問題であろう。この問題に関して，4島と本土とを結ぶ港湾整備や高速フェリーの運航といったハード面の整備や運賃の低価格化などはある程度進んでいるように思える。ただし，「離島は何でも高い」といわれるように，利益の循環が実現可能となる経済圏を構築することが求められる。

利尻島（利尻町・利尻富士町）と礼文島（礼文町）では，稚内市を中心市とする「宗谷定住自立圏」を形成する市町村として，平成23年に協定を結んでいる。3町は行政・産業・経済等において稚内市と繋がりが深く，水産業や観光事業においても連携が図られている。

一方，天売島・焼尻島では，体験学習，修学旅行生の受け入れ関する取り組みを行っている。留萌中部3町村広域観光連携会議（苫前町・羽幌町・初山別村）が提案する北海道教育旅行活性化事業の「（オロロンライン留萌中部エリア）教育旅行モデルプラン」（平成27年3月）には，天売島が「天売島・海鳥観察コース」（4泊5日）として取り上げられた。そこには，「海鳥観察」だけではなく，「ウニ採り・ウニの殻割り」や「魚の網外し」といった一次産業の体験メニューも含まれている。

交流事業に関しては，祖先の出身地母村との繋がりの中で「富山県南砺市平地区」や「石川県内灘町」との交流事業が継続している。その反面，かつて利礼三町で行われていた「小樽市・利礼三町児童交流育成事業」や「手を結ぶ利尻島・屋久島の会」などの交流事業は休止している。

文化的に類似性の強い4島であるが，観光振興上は大きく「宗谷定住自立圏」と「オロロンライン留萌中部エリア」の二つの経済圏に分かれているのが実情である。また，松前を起点とする日本海文化圏における交流の可能性を探ることで，他地域との差別化を図ることになるだろう（図3，参照）。

おわりに ── 着地型観光の推進に向けて ──

4島の持つ希少な自然資源を観光対象とした事業化は，エコ・ツアーや観光ガイド（写真3，参照），教育旅行という形である程度は結実しているといえよう。しかし，ニシン漁に関わる文化については番屋（資料館）などの

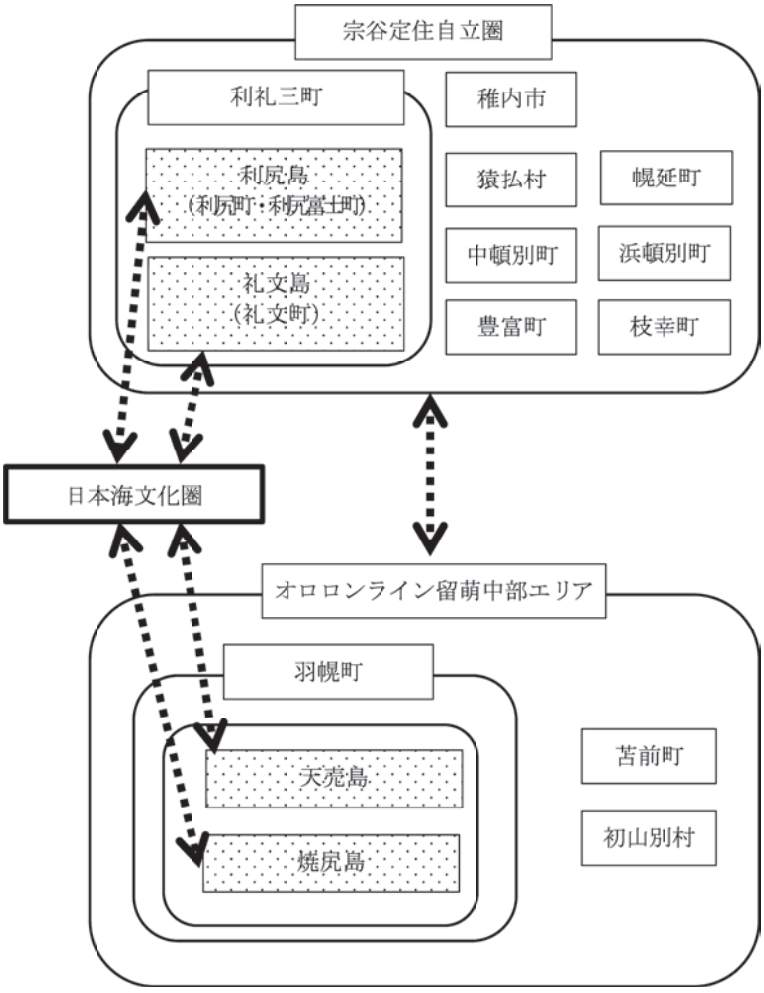

図３ ４島の経済圏と文化圏

一部の資源を除けば，ほとんど手つかずの状態である。特に，本稿で記述した社寺やその祭礼，民俗芸能に関わる文化はコミュニティの中心に位置するのであり，それを守り伝承する行為もある意味で着地型観光の入口である。さらなる経済効果を期待するのであれば，専門家やエージェントとの連携も必要になるだろう。

こうした着地型観光を推進するには，住民主体のプラットフォームを構築することが不可欠である。地域資源の掘り起しや住民活動の統合，異業種や外部機関との連携など，地域住民が事業主体となって実践的に活動することが重要だからである。そうした活動の蓄積が地域のブランド力を醸成することにつながるのではないだろうか。

写真３ガイドツアー（焼尻島/筆者撮影）

［付記］本稿は，一般社団法人寒地港湾技術研究センターと共同研究した「離島観光に関する研究」の成果の一部である。